

---

# 遊戯王GX の世界に行ってみた

上昇氣流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX の世界に行つてみた

### 【Zコード】

Z9321Z

### 【作者名】

上昇気流

### 【あらすじ】

GXの世界に行く事になった主人公の話です。自分は小説などを書くのが始めて+文章力皆無が合わさり、ところどころおかしいことがあるかもしれませんが温かい目で見守ってください。

## プロローグ

みなさん大変です。  
私はいまだのくらい広いのか分かりませんが見えるところが全て真  
っ白が場所にいます。

小説などにありますか此処にいるところは私は死んだのでしょうか？

「その通りよ。」

目の前に女の人が滲みでるように現れる。  
私は目の前に現れた女性に問いかける。

「あなたは何者ですか？なぜ私はここに？」

「なんて言えばいいのかな。わたしはあなたがいた世界を管理する  
いわゆる神様みたいなものよ。そしてあなたがここにいるのは端的  
に言えば死んだからよ。」

「死んだ？私はそのようなことは記憶にないのですが。」

「それは無理もないわね。あなたはコンビニで雑誌を読んだるとこ  
ろにトラックが突っ込んできたからよ。あなたは即死、トラックに  
気づく間もなく死んだのだから。」

「そうなのですか。私はこれからどうすれば？天国にでもいけばい  
いのですか？」

「今回あなたの死はわたしが田を離した時に起つてしまつた不

測の事態です。なのであなたには別の世界に行つてもらいたいと願います。」

「別の世界? 私に転生しようと?」

「そうです。あなたが行く世界の候補としていくつか書いておいたから自分で選んでね。」

彼女から渡された神を見ると

- ・モンスター・ハンター
- ・ガンダム
- ・ドラゴンクエスト
- ・遊戯王GX
- ・リリカルなのは etc.

「ほとんど死ぬじゃないですか。」

「仕様がないじゃない。わたしが管理している世界なんてそんなところよ。一番まともなのがあなたがいた世界だったのよ。」

「安全そうな遊戯王GXがいいですね。一応ルールは知っていますから。」

「ここのだけの話、私は一時期遊戯王に嵌つていたことがあるのです。アニメもみていましたよ、5D'sでしたけど。」

「そり、ならGXの世界で決定するけど他に必要なものはある?」

「ならアニメのカードとOCGのカードを10枚くらごづつもあればませんか?」

「それだけ？」

「それだけとは？あっちの世界ではテュエルで強ければ食べていけるので特に必要はないです。」

「ならあなたと一緒にあっちに送るから。それとあなたのこれから  
の名前は夜月 同（やづき つきさ）よ。」

「わかりました。それでは一回目の人生を楽しんできます。」

そう言つて私の意識は落ちる。

## プロローグ（後書き）

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

## 主人公設定

名前

夜月 司（やづき つかさ）

性別

女

身長

153cm

容姿

ペルソナ4の白鐘直斗

性格

普段はおとなしく落ち着いている印象を与えている。  
静かな所と高い所が好きでいつも騒がしい十代が苦手。  
リスクトデュエルを手抜きと言つて嫌つていて。  
ビートダウンが苦手でロツクなどのテックをよく使用する。  
本人はできれば巻き込んでほしくないが原作キャラによつて物語に巻き込まれていく。

男性用の服を好んで着用している為男子によく間違われる。  
外に出るときは帽子を田深にかぶる癖がある。

## 主人公設定（後書き）

あたまを汁がでなくなるくらい絞つて書いてみました。なにか不審な点がありましたら、報告ください。

「んん・・・。」「は？」

まぶしい光を受け目を覚ます。

まず目にはいったのはチェックの天井。なんかちょっと心配になつた。

寝ていたベッドから起き、部屋を見回す。テレビやテーブルなどがおいてあり普通の部屋を大差ない。しかし壁がすべてチェックでそこだけおかしい。

「そんな」とは置いておいてテーブルに山のよつに積まれたトランクを見る。

トランクの影にかくれるように置かれているものを手に取る。

「これは・・・銃？」

銃の下に置かれた紙には

「カードのついでにディスクの方も送つといったわよ。」

と書かれていた。つまりこれは銃型のディスクらしい。

ためしに腕につけてみる。銃口の部分が開いて、残りの部分が横に回転する。

シリンドラーの部分にデッキをいれると見えた。

トランクを開けると生前とは比べ物にならない量のカードがあつた。アニメで見た事がある時械神のカードを見つける。

たしかこれはバトル終了時に効果が発動するんだつた気がする。

記憶を頼りにトランクにあつたカードを集めてデータを作り、これを試験のときに使おうと思う。

家にあつたカレンダーを見るるとアカデミアの入学試験は2日後にあると書いてある。

なのでもう少しデータを増やそうと思つ。

（2日後）

試験会場に着てみると思ったより人が多かった。  
正直に言つてしまつと異常だ。

受験票をもらつて指定された部屋にいきます。  
アカデミアの試験は筆記と実技の2種類があり、筆記が合格しないと実技は受けられないはず。

それなりに知識がある私にはあまり関係ないですね。

試験開始の合図と共に貰つた紙を表にする。

問題を一通りに見て簡単そうな問題から解いていく。

何問か分からなかつたものがあつたがとりあえず全部埋めておいた。

後日、通知が届いた。

結果は合格でした。まあ前世の知識を持つていて私の敵ではありませんでしたが。

受験番号は5番でした。私の上に4人いると言つことですね。

実技試験は3日後なのでそれまでがとても暇ですね。私近くに知り合いがないので。

（3日後）

時間に余裕をもって会場にきた。

まだ試験が始まつていまいのでそこまで人はいない。

昨日は遅くまで起きていたのでここで少し仮眠をとろうと思いつい会場の近くのベンチに座る。

しばらくして係員の人に起こされる。

時刻を聞くと8：30・・・あれ？もう始まつてゐる？

急いで会場に入ると

「ガツチャツ！..楽しげデュエルだつたぜ、先生！..」

「そんな、ワタ シがこんなドロップアウトボーグに負けるナシ

テ」

と嬉しそうにしている十代と落ち込んでいる先生がいた。  
どうじょつかなと考えていると

「セレジのドロップアウトボーグも受験生ナホーネ？」

「ボーグ？一応そうですけど・・・受験番号は5番です。」

「では、君の相手は私がするホーネ（一桁に勝てば汚名は返上できるホーネ）。」

どうやら試験は行ってくれるらしい。

「準備はいいホーネ？」

「大丈夫です。」

と言つてディスクを取り出す。

「何で銃をもつてゐるノーネ。」

「これが私のディスクです。」

銃を手首につける。銃口の部分が開いて、残りの部分が横に回転する。シリンダーの部分に「テッキを入れると「テッキが勝手にシャツフルされる。

「私？それよりも見たこと無いディスクなノーネ。」

「両親が作つてくれたものですから世界に一つしかないと 思います よ。」

「それでは・・・」

「「「デュエル（です・なノーネ）」」

「先攻は先生に譲ります。」

私：4000 クロノス：4000

「ワタシのターン、ドローなノーネ。ワタシは手札からトロイホースを召喚するノーネ。そして、手札から『二重召喚』を発動するノーネ。このターン私はもう一度通常召喚を行えるノーネ。トロイホースは一体で「体分の生贊になるノーネ。トロイホースを生贊に古代の機械巨人アンティーカ・ギアゴーレム」を召喚するノーネ。ワタシはこれでターンエンドなノーネ。」

周りは「終わった……」とか「勝てるわけない」とか言つているけどこのデッキはそんな簡単には負けないんだよね。

「私のターン、ドロー。私は時械巫じかいみ」を特殊召喚します。時戒巫女は時械神と名のつくモンスターを召喚する場合、二体分の生贊になります。時戒巫女をリリースして時械神ミチオンを召喚します。時械神ミチオンで古代の機械巨人を攻撃します。」

「攻撃力0のモンスターで攻撃するな！」テ自滅行為な！」

「時械神ミチオンは戦闘及びカードの効果によつて破壊されず表側攻撃表示の場合プレイヤーへの戦闘ダメージを0にします。「なんでストト！」このカードが戦闘を行つた場合、相手のライフポイントを半分にします。よつて先生のライフは半分になります。カードを一枚伏せてエンドです。」

クロノス：40000 20000

「思つたよりやる！ネ。ワタシのターン、ドローな！ネ。ワタシは古代の機械工兵アンドイーク・ギアソルジャー」を召喚する！ネ。カードを2枚伏せてターンエンドな！ネ。」

「私のターン、ドロー。時械神は自分のスタンバイフェイズにデッキに戻ります。私は伏せカード虚無戒きよむかい－アインを発動します。虚無械アインは手札のレベル10以上の天使族モンスターをリリースなしで召喚できます。そのかわり攻撃力は0になります。効果により私は手札から時械神ラフィオンを召喚します。ラフィオンで古代の機械巨人に攻撃します。ラフィオンは戦闘を行つた相手モンスターを手札に戻し、戻したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えます。古代の機械巨人の攻撃力は3000なので3000

ダメージです。」

クロノス：2000 - 1000

「ペペロンチノー！ワクシーガ、1日に2度もドロップアウトボイに負けるなンーテありえないノーネ。」

なにやら叫んでいる先生に

「先生、私はボーイではなくガールですよ。」

と叫びと

「な、なんでスート！」

「それより先生、合格ならブルーではなくレッドでお願いします。」

「なんでなノーネ？」

「豪華あざれると体調をくずしちつなので。」

「分かつたノーネ。善処するノ。」

それだけいって私は会場をでていく。

## お詫び（後書き）

主人公が使ったデッキは時械神デッキでした。時械神つてまだ2枚しかOCG化していないんですね。もうとっくにカード化しているものと思っていました。感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします。

昨日合格通知がきました。  
所属は先生にお願いしたのでオシリスレッドになっていました。  
けれどなぜか届いた制服が男用になつていました。  
まあ着ますけど。

「入学式当日」

「こじでも校長先生の話は長いですね。聞いていませんが。  
あたりを見回しても女子はあまり見られない。  
私の前に立っている十代は話を聞かず立つたまま寝ています。  
しばらくして話は終わり式も終わつた、といつより気づいたら終わ  
つていた。

「とりあえず寮ですね。」

支給されているPDAで寮の場所を確かめる。  
同じ場所に向かう人は男の人しかいない。  
女子はブルーに入る所以当然といえば当然です。

寮は言われたほどボロくはなく、私好みです。  
自分の部屋に入り荷物を置いてベッドにダイブする。  
三人用の部屋を一人で使つるのは忍びないですが女は私一人なのでそ  
れで納得します。

「こじは眺めも良いし、風情もあるぞー」

と隣の部屋で聞こえます。

まさか隣の部屋とは・・・

色々と騒がしくなりそうですね。

夜の歓迎会まで時間があるので新しい「トッキ」でもつべりましようか。

「夜」

食堂にはこると嘆き声が聞こえ、溜め息が自然とぐる。

嘆くなら自分の部屋でしてほしい、部屋でも迷惑なので森でやつてほしい。

「他の寮はすぐこのやつだつただー。」

その声にまた溜め息がでる。

覗きでもしたのですか？犯罪だと思いますよ、それ。

「寮長は人間ですらない……猫なのか？」

いや誰がどうみてもペットでしょ。

しばらくして置くから男の人が現れる。

寮長の・・・誰だっけ？忘れたけど除外「トッキ」を使つていていたと記憶しています。

それも十代の敵だったとも・・・私もやるうつかな。

「寮長の大徳寺だーヤー。 授業では鍊金術を担当している、よろ

しふーイヤー。」

「んーうまー。」

誰かが先生の挨拶に重ねて言つ。

誰かは知つてゐるけどもつ少し時と場合を考えてほしい。

「まざいすつ よ兄貴！」

「やうか？ むちやくちや 美味いぜこれ！」

「いや、やうこつ意味じやなくて……。 まだ先生が挨拶中だし。」

そんなことを言つてゐる間に先生が十代に近づいていた。  
背が高く見下ろすような格好になるので迫力はあるのだけれど顔が  
それを打ち消している。

「わたしは細かい事は気にしないの。」  
「わたくしは歯さんよろしく。」

そして歓迎会とは名だけのただの夕食だった。  
料理は質素でいい感じだし、とても美味しかった。  
欲をいうならもう少し料理の数が多いとよかったです。  
今度先生と一緒にくらうかな。

食後は大してする「」ことがなくのんびりすこした。  
しばらくしてビデオメールが届いた。  
おそらく万条田が送つてきたものだとおもつ。  
とりあえず見てみることにする。

『 やあ、ドロップアウトボーイ。午前0時、決闘場で待つてゐる。  
互いのベストカードを賭けた、アンティルールで決闘、デュエルだ。  
勇氣が有るなら……来るんだな。』

あれ？ アンティルールは禁止されていなかつたと思つたが。  
まあ面白そうだし、いつてみようかな。

僕<sup>ワタシ</sup>が作つた「テッキ」をもつて帽子を田深にかぶつて部屋からでる。  
あの「デュエル」は途中で終わるはずなので観戦するだけにとどめよう。  
私の「テッキ」は長期戦になりやすいからなおさらだけど。

「デュエルフィールド」  
決闘場につくとついたり始まつたばかりのようだつた。

十代はフレイムウイングマンを奪<sup>シ</sup>われてゐる。

「デッキ」が知られてゐるから対策をとられるのは当然じゃないかな。  
私は入り口の影にまぎれて決闘<sup>デュエル</sup>の観戦する。

「E・HEROクレイマンを守備表示で召喚！ ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー。地獄戦士<sup>ヘルソルジャー</sup>を召喚。」

なんか万条目が微妙な気がする。

あれつて攻撃を受けて墓地にいかないと効果が発動できないカード  
で類似の効果を持つてゐるアマゾネスの剣士の方が使えると思うの  
だけれど。

「いけ！ フレイムウイングマン！ フレイムシユート！ フレイムウ  
イングマンの効果により破壊したモンスターの攻撃力分のダメージ  
を、相手プレイヤーに与える。」

フレイムウイングマンの腕から炎が十代に向かつて放たれる。  
十代は苦しそうにしているけどあれはソリットビジョンだと想つた  
だけれど・・・  
万条目はサイコデュエリストなのかな。

「お前の場にはお前を守るモンスターは1体も居ない！地獄戦士へ  
ルソルジャー！ヘルアタック！」

「いくらなんでもその攻撃名はないと思う。  
それなら地獄関係のモンスターはみんなその名前になってしまつよね。」

「融合モンスターを封じられてもう打つ手無しだな。スマールタウ  
ンはどうだつたか知らないがお前はデュエル・アカデミアでやつ  
ていけるレベルではない、思い知つたか！！俺は場にカードを伏せ  
て、ターンエンドだ！」

あの程度で融合を封じたと思つてゐる万条田に溜め息が出る。  
十代のデッキに融合のカードが一枚だけなはずがない。

HEROデッキなら融合は3枚はいつてゐるはず。

一枚つぶしただけでいい気になつてゐる彼の気が知れない。  
本気でつぶすなら融合禁止エリアつかえればいいんじやないかなあ  
どと思つてゐると

「次の攻撃で俺の勝ちは決まりだ！カード、ドロー！ 行けえフレ  
イムウイングマン、スパークマンにフレイムシユートだ！」

「属性カード、異次元トンネルミラーゲート発動！」

すでに終盤になつてゐた。

ミラーゲートはE・HEROが戦闘する時、相手モンスターとコン  
トロールと入れ替えて戦闘するカードでE・HERO限定の強制転  
移のようなものになるけどコントロールを得られるのはエンドフュ  
イズまでと使い勝手は悪い氣がする。

「くつ、ドロップアウトのオシリスレッドが調子に乗るなよ。俺は手札からヘル・ブラストを発動！自分のコントロールするモンスターが破壊された時、破壊したモンスターを破壊しその攻撃力の半分のダメージを与える！更に罠カード、リビングデッドの呼び声発動！」

リビングデッドは墓地からモンスターを特殊召喚する優秀なカードだけどサイクロン等で除去されやすいのが難点なんだよね。

「地獄戦士ヘルソルジャーを特殊召喚！そして地獄戦士ヘルソルジャーを生け贋にして、地獄將軍ヘルジエネラル・メフィストを召喚！」

貫通効果とハンデスは強いけど攻撃力が1800と低いのがネックなカードだ。

そんなカードをだしたくらいでいい気になつてている気が知れない。

「決闘デュエルは99%の知性が勝敗を決する運が働くのはたつた1%に過ぎない。」

私はそれを間違つてていると思う。

知性も必要だけど運も大きく関わつていてるはず。

計算でもしない限りシャツフルされたデッキのどこにどんなカードがあるか分からぬのだから。

「その1%に全てを賭ける！俺のターン、ドロー！」

十代が笑みを顔に浮かべる。

「ガードマンが来るわ！アンティルールは校則で禁止されてるし、

時間外に施設を使ってるし校則違反で退学かもよ…」

気づかなかつたけど自分の他にも観戦している人がいたようだ。  
そんなこと言つくりになら最初から止めようとは思わなかつたのか  
な?

私は止める気がないから言わないけど。

万丈目は十代の実力に呆れて取り巻きを連れて帰り、駄々を捏ねる  
十代を明日香と水色が強引に連れだした。

そして施設の電源を落として少し過ぎた時、ガードマンが来た。  
最後まで見届けて私はその場を後にする。

学校の前に十代達が話している。

「あのまま続けていたら、アンティルールで大事なカードを取られ  
ていたんじゃないの?」

「いや、あの決闘は俺の勝ちだぜ。」

そういうつて十代は死者蘇生を見せる。

自分又は相手の墓地からモンスターを特殊召喚するカード……で  
も。

「あの決闘は君の負けだよ、遊城十代。」

「「誰! (だ)」」

「私はオシリスレッドの夜用同。実は私のところにも万条目からメ  
ールを貰いました。」

「貴方も万丈目君から決闘の誘いを受けていたのなら、なんであの  
デュエル

場で姿を現さなかつたのかしら?」

「なぜ姿を現す必要が?アンティルールは校則で禁止されているはずです。そんな簡単に行つていいものじゃないです。私は入り口にすつといましたよ。あなた達が気づかなかつただけです。行つてみたら決闘<sup>デュエル</sup>している人がいたので余興になると思つただけですよ。」

「うう・・・」

「それで、夜月君はどうしてアニキが負けだと思つの?」

「そうだ!俺はあるのターン、死者蘇生でフレイムウイングマンを復活させるつもりだつたんだ。万丈目のフィールドには伏せカードは無かつたし、フレイムウイングマンで攻撃していたら俺の勝ちだつただろ?」

「そう思つてゐる君にはカードをよく見ることをお勧めするよ。フレイムウイングマンには召喚制限で融合でしか召喚できないはずです。あの場面であなたができたのはクレイマンを守備表示で特殊召喚するくらいでしようかね。」

十代は慌ててフレイムウイングマンのカードを確認する。水色髪の子はよくわかつていないみたい、なんで合格できたのか分からない。

「本当だ。テキストには融合召喚でしか特殊召喚できないって書いてある。と、いう事はあの決闘<sup>デュエル</sup>は俺の負けか?」

「さあ、どうでしょうね。決闘<sup>デュエル</sup>は運に左右される。彼があれ以上のモンスターをだすかモンスターを破壊するカードを引かなければ勝

てたんじゃないですか?」

「う・・・・・へへうー。」

「私はもう帰つて寝ます。もう元に用はあつませんかい。」

「ちよつと待てよ。あそこまで言われて黙つてらんねえよ。俺と決闘エルテコしろ!」

「お断りします。あなたでは私には勝てません。時間の無駄です。明日も早いのですから。」

十代、水色髪の子、金髪の彼女はたしか明日香だった気がする、が絶句してくる。

「オシリスレッドなのに凄い自信ね。そつじてそこまで言える根拠を教えてもらいたいわ。」

「攻撃するだけしか能が無いあなた達のデッキでは私には勝てません。それに、実技では先生に勝つてますよ私は。」

と言つて寮へ歩き出す。

これで十代は私にちよつかいを出しきになくなるだろ。そんなことを思つと自然と笑みが浮かぶ。



「デュエルモンスターーズのカードはモンスターカード、融合モンスターカード、儀式モンスターカード、効果モンスターカード、そして罠カードと魔法カードがあります。罠カードは通常罠、カウンタ罠、永続罠に魔法カードは通常魔法、永続魔法、装備魔法、速攻魔法、儀式魔法、そしてファイールド魔法に分ける事ができます。」

「ベリースマート。オベリスクブルーのシニヨーラ明日香には優しすぎる質問でしタゞ。」

昨日十代と一緒にいた子・・・明日香が先生の質問に答えてほめられる。

こんな質問は基本中の基本で本来聞くべきではない。

「それでは・・・シニヨーラ夜月。」

「当てられたくはなかつたのですが・・・。」

「ファイールド魔法の説明をお願いします。」

しかたがいので席を立つ。

「ファイールドカードゾーンと呼ばれる特別な場所に、表側表示で1枚のみ存在することができる特殊な魔法カードで、新たにファイールド魔法が場合に破壊されます。発動したプレイヤーとその相手の側の双方に何らかの影響を及ぼすのが、ファイールド魔法の最大の特徴であり、欠点もあります。例えば、お互いに地属性デッキを使用し、場にガイアパワーを出した場合手札を1枚無駄にしたのと同じ

になります。幽獄の時計塔というカードは時計カウンターが4つたまると自分のみが戦闘ダメージを受けなくなるという効果をもっています。このように自分側にのみ影響し相手にはその効力が適用されないものも存在しているので注意が必要です。」

とりあえずこの辺で終わらせておく。

まわりにいた人は驚いたような顔をしていた。

先生は満足そうにうなずいている。

その後、水色髪の子が当たられたが答えられずみんなに笑われる。十代が先生を馬鹿にして授業が終わつた。

放課後、自分の部屋でカードを整理しているとビデオメールが来た。とりあえず再生すると音声のみで以下のメッセージが流れる。

『丸藤翔はあずかった。返してほしけば女子寮まで来られたし。』

丸藤翔つてだれ？

・・・もしかして水色髪の子かな？

おもしろそうだからまた観戦しにこいつと外に出ると一番会いたくない人物と遭遇する。

「ん？ 司か。お前にもビデオメール来たのか？」

「一応はきましたよ。相手はあなたを呼び出したいようですが」

「どうしてそいつ思つんだ？」

「ビデオメールで丸藤翔と言つていきましたよね。あなたなら弟分が攫われたら助けにいくでしょう。」

そんな会話をしながらじまじま歩いていっているとポート置き場についた。

「十代さん、漕いでくれませんか？」

「何で俺が漕がないといけないんだよ。」

「呼ばれているのはあなたでしょう。ならあなたが漕べべきなので  
は？」

といつたら納得したように自分も乗せて漕いでくれた。  
性格は悪くないですけど面倒ことに巻き込まれるのであまり親しく  
したくありませんけど。

女子寮につくと明日香と二人の女子生徒が翔を捕まえていた。

「アニー」

翔が弱々しく十代を呼ぶ。

呼び出した理由を聞いて溜め息が出る。

私は翔が女風呂を覗いた疑いがかけられているのだった。  
そんな理由で関係のない私が呼ばれたとなると少し怒りが沸いてく  
る。

話の流れからすると明日香は十代と決闘するんですね。

「ねえ司、私と決闘しない?もし私に勝つたら風呂場覗きの件は大  
田にみてあげるわ。」

「お断りさせていただきます。」

「なんで私が関係のない翔のために決闘テコエールしなければならないのか理解に苦します。」

そのまま十代を置いて帰ろうとする。

「待ちなさい。あなた、本気で帰るのつもりなの……」

「なぜ私が彼の尻拭いをしなければいけないのですか？それならば兄貴分である十代としていくださー。」

「帰るなんて許さないわよ。」

「別にあなたに許してもらわなくとも構いません。」

「待てよ同一翔が退学になつちまうかもしけないんだぞ！－！」

「だからなんですか？美人の入浴を覗けて退学なら男として本望でしょう。」

「だから覗いてないってば。」

「へんなことですよ。」

「いいつ。」

ディスクを取り出して翔に向かつて発砲する。  
弾は「うぜん」ゴム弾なので痛いだけの比較的安全な物です。

明日香と一緒にいた女子生徒がなにやら騒いでいるのを無視して明日香を見る。

そこには全身で戦えといつオーラを出している明日香がいた。この空気を抜け出す自身はないので帰るのは諦める。

「はあ・・・・・しようがないですね。どうなつても知りませんよ。」

「最初から受けでいいればいいのよ。ここは狭いわ。湖の中央で決闘デュエルしましょ。」

私は十代に漕いでもらい湖に移動する。湖の中央で決闘デュエルする。湖の中央でお互いにある程度の距離をとる。

「行くわよ。」

「お手柔らかに。」

「デュエル決闘デュエル! (です)。」

私：4000 明日香：4000

正直この「トリッキは使いたくなかったのですがしかたないです。

「私のターン、ドロー。HTワール・サイバー召喚!! カードを1枚セットし、ターンarendよ。」

「私のターン、ドローです。」

最初からかなりいい手札です。

このターンで決められるかもしません。

「私は手札から魔法マジックカードハリケーンを発動します。伏せカードを

手札に戻してください。異次元への案内人を召喚します。異次元の案内人は召喚に成功したときコントロールを相手に移します。」

「なんで召喚したモンスターを相手にあげるの？」

翔が疑問を口にします。

これが次の布石になるのですよ。

「さらに手札から光の護封剣を発動します。3ターン目の相手のエンドフェイズまで相手は攻撃宣言できません。カードを三枚セットしてターンエンドです。エンドフェイズ毎に、相手は異次元への案内人のコントローラーの墓地から

カード1枚を選択しゲームから除外しなければなりません。よつてあなたの墓地のカードをあなたが選び除外するのですがあなたの墓地にはカードがありません。よつてこの効果は発動しません。」

「それで攻撃を止めたつもり?私のターン、ドロー。」

「その瞬間、伏せカードを3枚発動します。生贊封じの仮面、宇宙の収縮、おジャマトリオの順に発動します。チエーンが積まれたのではまずおジャマトリオの効果が発動します。相手のフィールドにおジャマトーンを3体を守備表示で特殊召喚します。おジャマトーンが破壊されたときトーンのコントローラーは300のダメージを受けます。おジャマトーンは生け贊召喚の為にリリースできません。次に宇宙の収縮の効果ですがお互いのフィールドに存在するカードが5枚以下の時に発動できます。お互いが場にだすことができるカードは5枚となります。」

「つてことは私はもうカードを場に出すことができないということ!？」

「その通りです。しかしモンスターをリリースして召喚すれば大丈夫ですよ。しかし、生贊封じの仮面はお互いにカードをリリースできなくなる効果をもっています。このターンあなたができることはカードをドローするくらいですね。」

「つ・・・ターンエンドよ。」

「私のターン、ドローです。私は永続魔法レベル制限B地区を発動します。レベル4以上のモンスターを守備表示にします。ターンエンドです。」

「私のターン、ドロー。ターンエンドよ。」

「何もしないのですか？私のターン、ドロー。モンスターをセットしてターンエンド。」

「卑怯だわ。あなたには決闘者デュエリストとしての誇りはないの！」

「卑怯も何もそういうスタイルですから。」

「私のターン、ドロー。ターンエンドよ。」

「私のターン、ドローです。守備モンスターを反転召喚します。ステルスバードは反転召喚に成功した時相手に1000のダメージを与えます。」

「1000のダメージつてキャラツ。」

ステルスバードが起こした突風が明日香を襲います。

明日香：4000 3000

「ステルスバー<sup>ード</sup>は1ターンに1度裏側守備表示にできます。ステルスバー<sup>ード</sup>を裏側守備表示にしターンエンドです。早くしないといフが0になつて終わりですよ?」

「くつ・・・ドロー、ターンエンド。」

「私のターン、ドロー。ステルスバー<sup>ード</sup>を反転召喚し、1000ダメージです。あと2ターンですね。サレンダーしますか?」

明日香：3000 2000

「お断りよ!! カードをドロー。ターンエンド。」

「何をしても無駄なんですけどね。私のターン、ドローです。以下省略してターンエンドです。」

明日香：2000 1000

「私のターン、ドロー。ターンエンドよ。」

「私のターン、ドロー。ステルスバー<sup>ード</sup>を反転召喚し、1000ダメージです。」

明日香：1000 0

「ライフが0になつたので私の勝ちですね。ありがとうございました。さあ、帰りましょう。」

「あ、ああ・・・。」

十代が氣の抜けた声で答え、ポートを遭<sup>あわ</sup>き出す。

「あんなの決闘<sup>デュエル</sup>ではないわ。ただのなぶり殺しじゃない。無効よ無効！」

女子生徒Aが叫ぶ。

Bは何も言わず私の方をじっとみでいる。

「ロックの何処がいけないのでですか？これも立派な戦法ですよ。」

これ以上なにも言つてこなかつた。

明日香は煮え切らない表情のまま寮へと帰る。

寮につくまでの間十代も翔も一言もしゃべらなかつた。  
あんな決闘<sup>デュエル</sup>をすれば当然といえば当然なのだが。

部屋に入ろうとしたとき

「司・・・翔を助けてくれてありがとな。」

と十代がいつ。

それには答えずそのまま部屋に入る。

## 参話（後書き）

今回使用した「テック」は「コスモロック」です。完成すれば相手はでほぼ身動きが取れなくなります。「コスモロック」は作者が長年愛用している「テック」ですが、近年エクシーズやシンクロなどでロックから抜け出されることが多いのが残念です。

主人公は前話でのじぶんの方が強い宣言で明日香に興味をもたれ戦うことになりました。今回の「デュエル」の結果に明日香は不満を持ち次話で再戦させる予定です。

今日はテストの日だ。

遅れるとまずいのでいつもより30分早く起きる。

隣の部屋からぶつぶつなにか咳いているのが聞こえる。

隣の壁に向かって注意をすると聞こえなくなる。

オシリスレッドの制服（男子用）に着替え、赤色の帽子を田深にかぶり外に出る。

隣の部屋から翔が飛びだしてくる。

それに少し驚きながらアカデミアへ歩いていく。

教室に入ると一部の生徒から視線を向けられたが気にせず翔から離れたところに座る。

十代はまだきていない様子で姿は見られなかった。

寝坊だろうか？テストが終わる前に来れるはずだからあまり気にはしないけど。

テスト開始の合図ができる。

問題はあまり難しいものではないので自分はスラスラと解けた。周囲を見るところちらほら詰まっているようで考えている仕種をする人たちがいる。ブルーの生徒は流石と言つべきなのかペンが止まっている人はいない。

テストが開始してから30分位すぎて十代が教室に入ってくる。十代が万条目となにやら言い争いをしていると

「遊戯十代君、はやく問題用紙を取りにくる」ヤー。もう時間がな

いーやー。」

と大徳寺先生に呼ばれて用紙を取りにいく。

十代が席につくまでの間に色々な人が十代に視線をやる。  
おそらく、どうしてこんな奴が・・・とでも思つてゐるのだろう。  
私は10分で終わつてしまつたので残り時間で実技は何を使おうか  
考へることで時間をつぶした。

『これで筆記テストは終了。なお実技試験は午後2時から体育館  
で行いまーす。』

終了のアナウンスが聞こえると同時に生徒が一斉に外にでる。  
購買部で新しく入荷したパックを買いにいったんだと思う。  
私にはカードが腐るほどあるので買いにいく必要がない為教室に残  
る。

「ずいぶんと余裕そうね。50分のテストなのに10分でペンを置  
くなんて。そんなに簡単だつた、テスト。」

「ああ、昨日の私に負けた人ですか。何のよつですか?」

「うう・・・。そんなことよりあなたはパックを買いにいかなくて  
大丈夫なの?」

「パック? 購買部で新しく入荷されるのもですか? めんどうなので  
いきませんよ。」

「ふうん。それで、あなたは何をしていたの?」

「実技試験でつかうデッキを選んでいたのですよ。」

と言つて懐から『デッキケースを4つだす。

デッキケースに手を伸ばそうとする彼女の手を打ち落とす。彼女は抗議の視線を送つてくる。

「なにしているんですか？『デッキは決闘者<sup>デュエリスト</sup>の命ですよ。 そう簡単に人に見せる事はできませんよ。』」

「そうよね、ごめんなさい。 それよりあなたはいつもこれを持ち歩いていいの？」

「いつもではありませんが大抵は持ち歩いていますね。 なにが起きるか分かりませんから。」

「ところで私はあなたの名前を知らないのですが・・・。」

「私？名前言ってなかつたかしら。 私は天井院明日香、オベリスクブルーよ。」

「それでは私も言わなければいけませんね。 夜月司、オシリスレッドです。」

「ところで明日香さん、実技テストはどんなものなのでしょうか。」

「呆れた・・・実技テストはおなじ寮同士の人での決闘よ。」

「そうですか、ならこれでいいですね。『デッキが決ると暇ですね。・・・とりあえず購買部に行きましょうか。 もしかしたらパックがまっているかもしないので。』」

「そんな簡単」トッキを決めるのね。私も一緒にこつてもいいかし  
い。」

「構いませんよ。ただ・・・あまりこじなことなんてないと想いま  
すけどね。」

購買部へこつてみるとまつたくと話していほじ人はいなかつた。  
奥に十代達がトメさんとなにやら話していいた。  
十代が私達に氣づき呼んでくる。

「はあ・・・まつたく騒がしいですね。十代、パックは買つひとは  
できましたか?」

「いや・・・誰かが買ひ止めたらしくて買えなかつたんだよ。けど、  
俺は今朝助けた購買部のトメさんのおかげでパックが手に入つたん  
だ。」

「それでテストに遅れたといつことですか。で、あなたはパックが  
買えなくてそこで落ち込んでいるのですか。」

「そりっシス。筆記もダメだつたシス。このままじゅ退学シス。」

「もう簡単には退学にはならな」と思こまづ・・・あがんば  
つて。」

それだけ言つて彼等から離れる。  
一緒に来た明日香に

「私は体育館にここまづ・・・あがんばりますか?」

「せんせつがなくてもいいわよ。私も一緒にいくわ。」

「数分後」

「始まるわね。万条田君と十代の決闘<sup>デュエル</sup>が。」

「わつですね。といでなんで私の隣にいるのですか？」

「ダメだったかしら。それよりも司<sup>マサ</sup>さどしが勝つと思つへ。」

「十代があの時のよつてニスをしなければ勝てるのではないしあうか。万条田君の方も前回とおなじデッキだとは限りません。こんどわパワーでねじ伏せに来るかもしません。」

そんな事を話しているうちに決闘<sup>デュエル</sup>がはじまる。

「「<sup>デュエル</sup>決闘……」」

「じぐぞー！ 万条田ー！」

「万条田さんだー！」

「俺の先攻、ドロー。E・HEROクレイマンを召喚。ターンエン<sup>ド</sup>だぜ。」

ドローをした時十代の雰囲気か変わった、キーカードでも引いたのでしょうか。

なんていうチートドローですね。

「雑魚ぞろこの駄目ヒーロー『テッキ』め。お前の脆さを見せつやる。」

俺のターン、ドロー。俺は魔法カード打ち出の小槌を発動。このカードと、手札の要らないカードをデッキに戻しシャッフルし、新たにその枚数分ドローする。そして俺は・・・。」

万条目は4枚の手札を入れ替える。

打ち出の小槌が発動された時まわりが声を上げる。

「明日香さん、なぜみんなはあのカードに驚いているのですか？」

「打ち出の小槌と言えばめったに手に入らないレアカードよ。そんなこともしらないの？」

「私のデッキには普通に入っているのとそんなこと考えた事も無かつたです。」

驚いた顔をしている明日香を無視して決闘<sup>デュエル</sup>に眼を向ける

「しかも打ちでの小槌は使い捨てのカードではない。何度もデッキに戻る事により、何度も俺の手中にはいる。再び、打出の小槌を発動！打出の小槌と2枚のカードをデッキに戻し、再び2枚をカードをドローする！出でよ！ V - タイガー・ジェット！ 攻撃表示で召喚！さらに手札から永続魔法 前線基地を発動！ターンごとに手札からレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚できる。このターン、W - ウィング・カタパルトを攻撃表示で特殊召喚！出でよ、 W - ウィング・カタパルト！ そして、V - タイガー・ジェットと融合！ V W - タイガー・カタパルト！」

新しく出てきた青色のジョットのモンスターがタイガー・ジェットと合体する。

合体といつてもただ上に乗つただけなので見た目は全然かつこよく

ない。

「驚いたか十代、しかし俺のターンはまだ終わっちゃいない。更に俺はVW-タイガー・カタパルトの特殊効果を発動！手札を一枚捨て、相手モンスターを攻撃表示に変える！」

「なに!」

「ずるいぞ！攻撃力800のクレイマンが攻撃に回つたら……。」

「これも戦術なのだからさるいも卑怯もない。」  
「一体どこがさるいのや。」

「行くぞ十代！ ＶＷ - タイガー・ミサイル発射！  
碎せよ！ カードを一枚伏せてターン終了！」

「なんの、決闘はまだ始まつたばかりだぜ！ いくぞ、俺のターン、  
ドロー！ E・H I R O スパークマンを守備表示で召喚！ カードを一  
枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！ X・ヘッド・キヤノンを攻撃表示で召喚。更に永続魔法 前線基地の効果によりZ・メタル・キヤタピラーを特殊召喚！リバースカーボープン！俺はこのリビングデットの呼び声の効果により自分の墓地からモンスターを1体復活させる事ができる！そのモンスターは・・・。」

万条目がそういうと万条目の場に赤いドラゴンの姿をしたロボットが現れる。

XYZが場にでてきたところは「ハ」ンキャノンかな。

「いぐぞ十代！XYZを合体させ・・・XYZ・ドラゴン・キヤノン！まだ終わっちゃいない！俺はこのVW・タイガー・カタパルトと、XYZ・ドラゴン・キヤノンを更に合体召喚する！」

「また？」

十代が呆れている。

万条目はこのターン合体せず、そのまま攻撃していればたぶん勝つていたと思う。

ロボットが次々と合体変形していき、戦隊ものにててくるロボットになる。

攻撃力が合計5800から3000に上がるはどうかな。  
ブルアイズ・アルティメットドラゴン

青眼の究極竜は合計攻撃力から半分になるから問題ないのかな。

「これが！ VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキヤノンだ！」

隣で明日香が不愉快そうな顔をしている。

「明日香さん、なんでそんなに不愉快そうな顔をしているのですか？」

「なんであって、万条目君の場に攻撃力3000のモンスターがいるのよ！」

「そんなことですか。たいして驚くことじやないでしょ。3000程度なんて。」

「3000程度ですって！」

明日香が驚いたように自分の方を見る。

別に *Sin* トウルース・ドラゴンは攻撃力 5000 で場の *Sin* が破壊されると墓地か手札から特殊召喚される。

それに比べれば攻撃力 3000 はましな方だと思つけど。

「更に *VWXYZ* の効果を発動！」

万条目がそう言うとスパークマンが消滅する。  
十代は効果を知らないのか驚いている。

「いけえ *VWXYZ*、プレイヤーへ直接攻撃ダイレクトアタック！」

「待つた、リバース罠オープン ヒーロー見参！」

相手があのカードでなければなかなかいい手だと思つよ十代。  
でもね、*VWXYZ* は攻撃する時、表示形式を入れ替えさせる事が  
できる効果をもつていてる。

十代のデッキには *VWXYZ* に勝てるモンスターは入っていない。

「このカードにより、相手に選ばせたカードがモンスターカードだ  
つたならそれをこの場に召喚する事ができるー さあ選べ、万丈目  
！」

「万丈目さんだ！ 一番右だ！」

「俺はこのカード、バーストレーディを守備表示で召喚！」

「守備表示にはさせん！ *VWXYZ* が攻撃する時、モンスターの  
表示形式は俺の自由だ。 *VWXYZ* - アルティメット・ディスラク

「ショーン！ バーストレーディを粉碎せよー！」

「守備表示にはさせん！ ＶＷＸＹＺが攻撃する時、モンスターの表示形式は俺の自由だ！ ＶＷＸＹＺ・アルティメット・ディスラクション！ バーストレーディを攻撃！」

ＶＷＸＹＺが胸のキャノンからビームを放つ。バーストレーディが立ち上がり攻撃表示となりＶＷＸＹＺの攻撃を受ける。

十代のライフは一気に削られ残り1000になる。

「ターンエンドだ。これでまた丸裸、お前の場には1体のモンスターもいなーぜ。」

「俺は・・・俺のデッキを信じる。俺と共に最後まで戦ってくれるモンスターがこの中にいるかぎり俺は戦い続けるぜー！」

かつこいいセリフをいう十代。彼ならチートドローでこの場を逆転させられるカードを引けるだろう。

「ドロー！ 俺はハネクリボーを守備表示で召喚！ そしてカードを一枚伏せてターンを終了する！」

ハネクリボーが場でた途端女子から歓声が起る。それに耳を塞ぎながら隣を見て呆れる。明日香も他の女子と一緒に歓声を上げていた。もう帰つてもいいと思つ。

「俺のターン、ドロー。無駄だぜ、戦闘ダメージを0にするその毛

玉野郎がいたところでVWXYZの効果が除外する。「

「だつたらやつてみな！」

「ハネクリボーを蹴散らして十代ヘダイレクトアタックだ！アルティメット・ディスラクション！」

「来たぜ相棒！俺は手札2枚をコストに進化する翼を発動！」

「なにい？」

ハネクリボーがLV10に進化し、VWXYZの効果から逃れる。ハネクリボーラベルは相手のバトルフェイズに効果を発動でき、相手フィールド上の攻撃表示モンスターをすべて破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力の合計分のダメージを相手に与える。

ハネクリボーラベルの効果によってVWXYZは破壊され、万条目に3000のダメージ。

万条目はブレイングミスを犯した。

あの場で攻撃を行わないという選択を取れば次の自分のターンでLV10を除外して<sup>ダイレクト・アタック</sup>直接攻撃ができた。

十代のモンスターは総じて攻撃力が低く、VWXYZに勝てるモンスターはない。

「ぬうう、タンーエンド！」

「万条目ーこれでお互いにライフは1000ポイントづつ、ここで俺が攻撃力1000以上のモンスターを引いたらおもしろいよな。」

「なにをたわ言を…そう簡単に…」

確かにそうだ。

十代の「テツキ」に入つていて、まだできていない攻撃力1000以上のモンスターはフェザーマンとワイルドマンの2体のみ。もし違つていても十代なら別のカードでも強欲の壺を引くんだらうな。

「でも引いたらおもしろいよな！俺のターン、ドロー！俺はこの力  
ード・フェザーマンを召喚し、プレイヤーに直接攻撃！」

フェザーマンが万条目に爪を振り下ろし、決闘が終了する。

観客が歓声を上げているがまだ誰もミスが無ければ万条目が勝つて  
いたことに気づいていない。

「十代が勝つたわね。」

「そうですね。しかし、この決闘はミスが無ければ十代は負けて  
ました。」

「ミス？」

「とりあえずですが、最後のVWXYYZでのハネクリボーレV10  
に攻撃したのがミスです。あのモンスターは相手のバトルフェイズ  
中にしか効果を発動できません。攻撃を中止して次のターンまで待  
つていればハネクリボーレV10を除外して、フェザーマンの表示  
形式を変更して勝つていました。」

「でもあのカードは新カードのなよ。効果を知つていなくてもしか  
たがないなわ。」

「<sup>デュエル</sup>決闘においてカードの効果を知るのは基本だと思いますけどね。新しいカードなら相手に効果を聞くなりするべきだったのでは?万条田さんはそれをしなかつた為負けた、それだけです。」

さて十代はレッドからイエローに昇格みたいだけど彼がレッドから離れるはずがないので断るだろうね。  
そうなると昇格になるのは・・・自意識過剰かもしがれませんが私ももしがれません。

そんなことはどうでもいいのではやく<sup>デュエル</sup>決闘がしたいです。  
最初からずっと私のそばに座っている明日香にいつ出番なのか聞いてみた。

「ふふ・・・後で分かるわよ。」

これはもしかして再選フラグですかね。  
闘つたことのある相手とあまり闘いたくないんですけどね。  
特に彼女は完全ロックで勝つたのでできれば避けたいところ。  
まあ出番になれば分かりますか。

## 四話（後書き）

主人公と明日香の再選は文字数が多くなるので次の話しにまわしたいと思います。

楽しみしていた人がいたら申し訳ありません。

上昇気流は感想や意見、誤字脱字などのご報告を待っています。

十代と万条目の決闘<sup>デュエル</sup>が終わってしばらくして自分で出番が回ってく

る。

決闘場<sup>デュエルフィールド</sup>に降りると対面には案の定明田香がいた。

「あの・・・明田香さん。」

「なにかしら。」

「なぜ、あなたが私の田の前にいるのでしょうか。」

「それは私があなたの相手だからよ。」

「実技試験は同じ寮同士で行つて自分で言いましたよね。それなのになぜあなたは私の相手になれたのですか?」

「先生にお願いしただけよ。先生に勝った生徒と闘わせてほしいって。あいにく私は中学のときから成績優秀だったからちょっとくらいの私がままならOKしてもらえるのよ。」

「はあ・・・めんどくさい真似をしましたね。」

「なんとでも言いなさいー私はあなたに勝ちたいのー昨日みたいに何もできずに負けるのは我慢ならないのー!」

昨日よりの遙かに強い闘志を感じる。

そんなに昨日負けたのが悔しかったのだろうか。

いや、何もできずに負けたのが悔しかったんだね!つ。

「サレンダーはダメですか？」

「いいわけないでしょー。諦めて私と決闘しなさい。」

「分かりましたよ。やりますよ。それあなたが満足するのなら。

絶対に負けないという意思に圧倒され私が折れる。

明日香が相手なのでデッキを変える。

「あら、デッキを変えるのね。」

「ファンティックにはこれからもファンティックを使つべきでしょー。」

セツヒツと明日香は顔をしかめる。

ファンティックと言われたのがイヤなのだらう。

「「<sup>デュエル</sup>決闘（です）ー。」」

司・4000 明日香・4000

「先攻はあなたに譲るわ。」

「いいのですか？私のターン、ドローです。私はおろかな埋葬を発動します。デッキからインフェルニティ・デーモンを墓地に送ります。カードを4枚伏せてターンエンドです。」

明日香 side

モンスターをださずにターンを終了？

おそらく司が伏せたカードは攻撃反応型のカード。  
そうと分かっていても先手は取つておきたい。

「私のターン、ドロー！ エトワール・サイバーを召喚。エトワール・サイバーでプレイヤーに直接攻撃。」

「トランプ 罷力ード リアクティブアーマー 炸裂装甲を発動します。攻撃モンスターを破壊します。」

エトワール・サイバーの体が膨らんでき爆発する。

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

「私のターン、ドローです。手札からサイクロンを発動して伏せカードを破壊します。インフェルニティ・ネクロマンサーを召喚します。インフェルニティ・ネクロマンサーは召喚時、守備表示になります。インフェルニティ・ネクロマンサーの効果を発動します。手札が0枚の時、墓地からインフェルニティと名のついたモンスターを特殊召喚できます。」

手札が0枚の時に効果が発動するのね。

でもそれは危険な事でもある。

それは司を十分知っているはずだと思うのだけれど。

「私は墓地からインフェルニティ・デーモンを特殊召喚します。インフェルニティ・デーモンの効果を発動します。特殊召喚した時に手札が0枚の時、デッキからインフェルニティを1枚、手札に加えられます。私はインフェルニティ・デストロイヤーを手札に加えます。インフェルニティ・デーモンでプレイヤーに直接攻撃です。」

明日香：4000 2200

「トランク 養力ード ダメージコンデンサーを発動！手札を1枚捨てて受けたダメージ以下のモンスターを特殊召喚する。デッキからサイバー・エンジエル・弁天・を召喚。」

「ターンエンドです。」

「私のターン、ドロー！ブレイド・スケイターを召喚してターンエンドよ。」

「それだけですか？私の手札は1枚ですよ？」

「うるさい！そんな」と言つてないでドローしなさい！」

「わかつてますよ。私のターン、ドローです。インフェルニティ・デーモンをリリースしてインフェルニティ・デストロイヤーを召喚します。伏せカード サンダーブレイクを発動します。手札を1枚捨てて、フィールド上のカードを1枚破壊します。ブレイド・スケイターを破壊します。」

弁天ではなくブレイド・スケイターを破壊？

弁天を破壊した方が有利になるのに。

「インフェルニティ・ネクロマンサーの効果を発動します。墓地のインフェルニティ・デーモンを特殊召喚します。インフェルニティ・デーモンの効果でインフェルニティ・ガーディアンを手札に加えます。インフェルニティ・デストロイヤーで弁天に攻撃。手札が0枚の時、インフェルニティ・デストロイヤーが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に1600のダメージを与えます。」

明日香：2200 100

「インフルーティ・マークでトドメです。」

明日香：100 - 1700

また負けたわ・・・またライフを1ポイントも減らせず。それにあのデッキに私は手も足も出なかつたわ。

「明日香さん、あなたのデッキはファンデッキ・・・というよりもファンデッキよりもひどいです。よくそんなデッキで成績優秀なんて言えましたね。」

「な・・・な・・・。」

あまりのことに声がうまくでない。  
私のデッキを全否定するなんて。

「全面的にパワーが低すぎですし、趣味もかなり入っていると思います。そんなデッキでは私には一生勝てませんよ。」

それだけ言つて司は観客席に向かつて歩いていく。

『見させてもらいましたよ、夜月司君。特殊な環境でしか効果を発動できないモンスターを使いこなす、すばらしい決闘技術。そして手札を常に0にする常識にとらわれない思考。ここにいる全て者が驚いたはず。成績を優秀で、ブルーの生徒にも勝てる実力。よつて君もラー・イエローに昇格です。』

再び会場が盛り上がる。

1日に一人もラー・イエローに昇格したのだから当然でしょうね。

その言葉を聞いて司が立ち止まり校長の方を向く。

「鮫島校長、すいませんが昇格は辞退させてもらえませんか?」

『おや、なぜですか?』

「それはクロノス先生に聞いてもらおると分かります。とりあえず・・・質素なのが好きだから、ではダメでしょうか?」

『いや、その辞退を認めましょ。これからも決闘<sup>デュエル</sup>に励んでください。』

司は鮫島校長の話を聞かずに私のところに来る。

私に手を差し伸べる。

「早く行きますよ、明日香さん。」

その手を取つて立ちあがる。

『決闘場<sup>デュエルフィールド</sup>から出た後でみんなに注目を浴びつか、顔が熱くなる。』

## 五話（後書き）

フラグ立ちましたね  
しかし司は女・・・  
明日香はこれからどうするでしょうか  
それまだまだ作者も考えておりません  
なのでみなさんから案を募集したいと思います

期限は1月20日 午後4です

感想や意見、誤字脱字がありましたら報告お願いします

この前のテストの一件以来、色々と注目を浴びています。それに、何人かがカードをどこで手に入れたのか等尋ねてくるなど静かではありませんでしたが、最近はほどぼりが冷めてきたのかあまりそういうことがないのですが、ありがとうございます。

とりあえず暇だったので5D-sのボマーが使用していたジャイアント・ボマー・ニアレイドを主軸としたデッキを作つてみました。アニメと若干、効果の違いなどがあつたが使いやすくなつていていたことに少し驚いた。

最終調整をしていると不意に扉が叩かれる。

部屋に掛けられた時計は0時を少し過ぎたところを示している。とっくに消灯時刻を過ぎていて、誰が来たのか一応確認する為に扉を開ける。

扉を開けると、そこには明日香がいた。

溜め息をついてそのまま扉を閉めようと慌てた明日香に止められる。

「こきなり閉める事はないでしょ！それより話しがあるのだけど。

「それで？私の睡眠時間を奪つてまで話したい事とは？」

「島の裏にある今は潰れた特待生の寮に行きたこのよ。」

「それで？怖いから一緒に来てほしこうことですか。」

「ちひ、違つわよーただ一人で行くと心細いから・・・」

「なんでもいいですけど早めに行つた方がいいと思いますよ。」

「そ、そりやね。いきましょう。」

「一旦、部屋に戻り準備を整える。  
なんとなくだが、必要な気がしたのでさつさつ作ったティッシュも持つて  
行く。」

「場所は変わり廃寮に」

とりあえず今の感想はボロイの一言ですね。  
ボロをから廃寮になつたのはかなり昔だということがうかがえる。

門の前で明日香が花を添える。  
しばらく寮の方をじつと見つめる。  
少し間つて声を掛ける。

「入るのですか？」

「じばらぐは見回りのつもりよ。何度か調べて大丈夫そなうなら入つ  
てみるつもつよ。」(めんね、夜遅くに付き合つてもらつて。」

「別に気にしなくていいですよ。実は私も一度来て見たかったので。

」

「そ、それならよかつたわ。」

そう言つて明日香は懐中電灯を持つて歩き出す。

私も懐中電灯を持って後ろを歩く。

しばらく歩いているとパキッと音がする。

近くで悲鳴が上がる。

懐中電灯を向けられて手をかざす。

何をしに来たのか分からぬが十代達がいた。  
話しを聞くと探険にいらして

十代に明日香が探険をやめるようになつたが十代はやめる気が無いよう  
で明日香は自分の兄の事を話す。

しかし、十代は鬱陶しそうにしてくる。

「やうこえまは向でいひてゐんだ? 明日香と一緒にいたようだ  
けど。」

「それは・・・やうだけど。」

十代は口じもる。

そんな十代に諦めたのか明日香は

「勝手にすればいいわ。」

と黙つて踵を返して歩き出す。

「どうなつても知りませんよ。」

そう言つて明日香の後を追う。

十代達から離れ、廃寮の周囲を歩く。

特にこれと言つたものはなさそうに見える。

廃寮に戻る途中に明日香を見失い、あたりを探すと大男が氣絶しているのか無抵抗の明日香を連れていく。

目的がわからないが明日香に危険が及ぶと危ないので気づかれないように後をつける。

大男が廃寮に入ったので、いけないとは分かつてゐるが中に入る。

しばらく後をつけると大部屋につく。

そこで大男は明日香を縛つて棺桶の中に入れる。

そこで明日香が目覚める。

「な、なによこれー?」

「ふははは、貴様には遊城十代を誘きだす餌になつてもらおう。」

大男が持つていた物を明日香に見せる。光に驚いたのか明日香は悲鳴を上げる。

「そこまでにしてもらいましょう。」

私はティスクを大男に向けて言つ。

「む? 何者だ貴様!」

「私ですか? 彼女の知り合い・・・とだけ言つておきましょ!」

「なるほど・・・彼女を助けに来たと?」

「そうです。明日香さんから離れてください。」

「わたしも彼女に危害を加えるつもりは無い。用があるのは遊城十代ただ一人。が、そなたには我に協力してもらいたい。」

「どういう意味ですか?」

「明日香ー。」

「どうやら十代達も明日香の悲鳴で来たようだ。いつもまにか明日香は気を失ってしまっている。」

「明日香になにをしたんですかー。」

「司ーお前も明日香の悲鳴を聞いてこーに?」

「ふふふ、なにもしていない。この者の魂は深き闇に沈んでいる。ようこそ、遊城十代。我が名はタイタン、闇の決闘者<sup>デュエリスト</sup>。闇のゲームを愛する闇の決闘者。」

「ふざけんな!闇のゲームなんてあるわけ無いだろー!」

「試してみれば分かるだろうよ小僧。ここは何人も踏み入ってはならぬ禁断の領域。私はその誓いを破る者に制裁を下す。」

「ここでいなくなつた人達は貴様のせいだなー明日香は返してもらうぜー。」

「わたしに闇のゲームで勝てるならな・・・遊城十代。」

十代の後ろでコアラ顔の子がバツクの中を探している。

おそらく決闘盤を探しているのだろう。

決闘盤を受けとり十代はタイタンの方を向く。

「望むところだ！」

「その前に私と決闘です。私に勝てないのでは十代には勝てませんよ。」

タイタンと決闘しようとする十代の前に立ちタイタンにディスクを向ける。

「ふ、いいだろ？ 遊城十代を戦う前に貴様を消し去つてくれよう。」

「すいません十代。あなたの番は後です。」

「「決闘（です）！」」

「先手はもらいます、ドローです。モンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンドです。」

「わたしのターン、ドロー！わたしはインフェルノクインデーモンを攻撃表示で召喚！このカードがフィールドに存在するとき、デーモンと名のついたモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップする。インフェルノクインデーモンで守備モンスターを攻撃！」

「スファイア・ボム 球体时限爆弾の効果を発動します。裏守備表示

のこのカードが攻撃された時、ダメージ計算前に攻撃モンスターの装備カードになります。次の相手のスタンバイフェイズに装備モンスターを破壊して装備モンスターの攻撃力分のダメージを引きます。

「

「なに…？」

「さらに速攻魔法 速攻召喚を発動します。手札からモンスター1体を通常召喚します。私はマジック・リーカター・AEDを守備表示で召喚します。デーモンデッキですか…確かに強力ですがデーモンはライフを払わないと場に維持することができません。」

「そんな物は必要無いのだが、このカードの前ではな。フィールド魔法発動！」

フィールドが赤く染まり地面から悪魔等の石像が現れる。

「私はフィールド魔法、パンティモニウム万魔殿 - 悪魔の巣窟 - を発動させた。このカードにより、デーモンデッキを維持するコストは発生せず、デーモンと名の付くモンスターは戦闘以外で破壊された時、転生する能力を得る。」

「残念ですがそれは無理ですね。マジック・リーカター・AEDと効果を発動します。相手が<sup>マジック</sup>魔法カードを発動した時そのカードを破壊し、相手に800のダメージを引きます。」

マジック・リーカター・AEDがお腹のミサイルを多數打ち出す。ミサイルが壁にあたるとヒビが入り、崩れしていく。最後の1つがタイタンに当たる。

タイタン・4000 3200

「ぬぬう、カードを伏せてターンエンド。」

「私のターン、ドローです。トラップ・リアクター・RRを守備表示で召喚します。2枚のカードを伏せてターンエンドです。」

「わたしのターン、ドロー！「スタンバイフェイズ時にスフィア・ボムの効果によって装備モンスターを破壊します。」なに…？ぐああ。」

インフェルノクイン『デーモンが爆発してタイタンを襲う。

タイタン・3200 1300

「わたしはデーモン・ソルジャーを攻撃表示で召喚。デーモン・ソルジャーでマジック・リアクター・AEDを攻撃。」

「罠カード フェイク・エクスプロージョン・ペンタを発動します。モンスターは戦闘では破壊されません。そしてダメージ計算後に手札、墓地からサモン・リアクター・AIを特殊召喚します。」

「ば、馬鹿な。」

「ターンエンドですか？」

「ぐぬう、カードを伏せてターンエンド。」

「私のターン、ドローです。私はサモン・リアクター・AIの効果を発動します。このカードとマジック・リアクター・AED、トラ

ツプ・リアクター・RRを墓地に送る事で手札、デッキ、墓地からをジャイアント・ボマー・エアレイド特殊召喚できます。ジャイアント・ボマー・エアレイドの効果を発動します。手札を一枚墓地に送ることで相手のカードを一枚破壊します。手札を捨てて、その伏せカードを破壊します。」

ジャイアント・ボマー・エアレイドが胸の機関銃で伏せカードを擊つ。

破壊されたカードは聖なるバリア・ミラーフォース。

そのまま攻撃していれば負けていた。

「ジャイアント・ボマー・エアレイドでプレイヤーに直接攻撃です。」

タイタン：1300 - 1700

「さて・・・明日香さんは返してもらっていますよ。」

「ち、勝手にしろー！」

タイタンは煙玉をつかつて逃げる。

十代達が私の元に来るがそれを無視して氣絶している明日香をおんぶする。

「それでは十代、私はもつ帰ります。あなたも早く帰った方がいいですよ。」

廃寮をでて女子寮へと歩いていく。

十代 side

「なんだつたんだな、あいつは。」

「隼人は知らないのか？」

「ああ、それにあの戦い方・・・強いんだな。」

「司も俺と同じで先生に勝つたからな。それも一度もダメージを受けてずにな。強いのは当然だと思うぜ！」

「ノーダメージで勝つた！？」

隼人は司のことを知らなかつたようでとても驚いていた。

「アニキ！ そんなことよりも夜が開けるツスよ。」

「ヤツバ！ みんながおきる前にいそいで寮に戻らうぜ！」

司、いつかお前とも戦つてみたいぜ。

## 六話（後書き）

感想や誤字脱字がありましたら報告お願ひいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9321z/>

---

遊戯王GXの世界に行ってみた

2012年1月12日20時00分発行